Turkic Dialects (*Dīwān Luγāt at-Turk*) Part 1.
Gabain, A. (1959); Türkische Turfantexte X. ADAW.
Hamilton, J. (1969); Un acte ouīgour de vente de terrain provenant de Yar-Khoto. *Turcica* 1.
『漢維詞典』(1982) 新疆人民出版社。
Lessing, F. D. (1960); *Mongolian-English Dictionary*. University of California Press.
森安孝夫 (1989)「ウイグル文書劄記(その一)」『内陸アジア言語の研究』Ⅳ。
Radloff, W. (1928); *Uigurische Sprachdenkmäler*. Biblio Verlag. Osnabrüch 1972 再版。
庄垣内正弘 (1984)『ウイグル語・ウイグル語文献の研究』Ⅰ 神戸市外國語大學。
――――(1987)「ウイグル文献に導入された漢語に關する研究」『内陸アジア研究』Ⅱ。
――――(1991, 1993)『古代ウイグル文阿毘達磨俱舎論實義疏の研究』ⅠⅡ 松香堂。
Warnke, I. (1978); *Eine buddhistische Lehrschrift über das Bekennen der Sünden, Fragmente der uigurischen Version des Cibei-daochang-chanfa*. Berlin (Dissertation).
Zieme, P. (1980); Uigurische Pachtdokumente. *AoF* 7.
――――(1992); Eine uigurische Hausverkaufsurkunde aus Qočo. *AoF* 19.

一九九三年十二月　大阪大學出版會
B5判　第一卷　六〇二頁　第二卷　三三〇頁　第三卷　一〇六頁　三〇〇〇圓

Monika Gronke

Derwische im Vorhof der Macht: Sozial-und Wirtschaftsgeschichte Nordwestirans im 13. und 14. Jahrhundert

安藤志朗

十三世紀から十六世紀に至るイラン史は、その研究史上、およそ二つの觀點から考察されてきたかにみえる。一つは十三世紀のモンゴルの侵攻を起點とし、それ以降トルコ・モンゴル的な諸要素がイスラムの枠組の中で、どのような形態で保持され、あるいは變容したかという、時間の流れに沿って追究していく見方であり、いま一つは、十六世紀初頭の十二イマーム・シーア派を標榜するサファヴィー朝の成立は、如何なる歴史的諸要因がどう關係し作用した結果なのかという、いわばサファヴィー朝前史としての見方である。二つの觀點共に、宗教、政治、社會、經濟、軍事等あらゆるテーマを包括するものであるが、同じ事象も、いずれの觀點をとるかで、あたかもプリズムのように、微妙な印象の違いを示す。

十三・十四世紀の北西イランは、諸イル・ハンたち、チョバン系アミールたち、ジャライル朝等モンゴル系政治權力が浮沈を繰り返す一方、諸々のイスラム神秘主義教團が、當時の宗教的メンタリティーを反映するかのように生成し活動した。サフィー Safī al-dīn (一三三四年没) を初代の教團指導者シャイフとするアルダビールのサファヴィー教團も、その一つであり、これが、すなわち後のサ

ファヴィー朝（一五〇一―一七二二）の萠芽期の姿なのである。ミノルスキー、ヒンツ、ペトルシェフスキー、シュプーラー、ロエマー、ラムトン、オバン等、今世紀のイスラム・イラン學に偉大な足跡を殘した綺羅星のごとき學者達は、モンゴル支配下のイランについても精緻な研究を繰り廣げ、次の世代の研究に指針を與えてくれている。ここに紹介する書は、ヨーロッパに發生し發展してきたこのイラン學の傳統を繼承しつつ生まれ、聖者傳と文書の援用・分析というメソッドの特徴を遺憾なく示すものである。考察對象は、サファヴィー教團を中核とする神祕主義教團の社會・經濟的活動とその影響力であり、後で述べるように、その結論はサファヴィー朝前史の基本的認識に觸れるものである。

著者グロンケ女史は、一九七〇年より五年間、ゲッティンゲン大學で英文・佛文學を主に專攻した後、同大學でイスラム學を志した。主專攻はアラブ學（師は Albert Dietrich）、第一副專攻はイラン學（同じく Walther Hinz, Gottfried Herrmann）、第二副專攻はトルコ學（同じく Gerhard Doerfer）であったという。その間、ラテン語、ヘブライ語、アルメニア語も習得した。一九八三年から二年間、フランス外務省の囑託でパリにてペルシア語を敎えた。一九八五年から一九九一年までフライブルク大學東洋學ゼミにて、講師・助手として授業に携わった。本書は、このフライブルク在任中に、Habilitation（大學敎授資格論文）として執筆されたものである。現在ケルン大學東洋學ゼミの敎授の職にある。

「**序文**」（1―6）。研究史の展望の中で、モンゴルの支配に關する研究では、社會・經濟史は綿密な考證に缺ける傾向にあること、サファヴィー朝研究者は、モンゴル時代のサファヴィー教團に十分には關心を拂わないこと、更に、ある特定の地域のミクロ的視點からの觀察が、史料不足も原因して、オバンやモレの研究を除けば、なされていていないことを指摘する。著者が北西イランを對象に行なおうとすることは、未だ十分活用されていない以下に擧げる三つの史料の援用であり、それらが示す「個々のヴィジョンの總合」である。著者は言う、「とりわけ社會・經濟史に關して多くの情報を提供するこれら三つの史料の詳細な分析が、本書の目的である」、と。

「**史料**」（7―28）。三つの史料の解題がなされる。一つは、一三五八年 Ibn Bazzāz によってペルシア語で書かれた、サフィーの傳 *Ṣafwat al-ṣafā* (*SS*) なる聖者傳である。その奇蹟譚ゆえに、史料としての價値が評價されにくい聖者傳ではあるが、*SS* では、奇蹟譚の背景に現れる傳記的要素、固有名詞が言及される政治的な事件や、地誌上の描寫は、大體において信用することができるという(8)。この聖者傳はまた、「年代記や文書では觸れられない、民衆―農民、手工業者、小商人ら下層の人々―の日常生活、考え、價値觀を反映している。その意味で、文化史、社會心理學、精神史上、貴重な史料である(9)。」尙、使用された寫本は、サファヴィー朝成立以降になされる改變を免れたと思われる、十五世紀書寫の二つの寫本の內、イスタンブル本の方である。

二つ目の史料はアルダビール文書群で、著者が主に分析したのはその內の、一二四九年から一三七七年にわたる、賣買・賃貸契約やワクフを中心內容とする計二〇六通の私文書である。著者は既に博士論文で、この文書群の一部を扱っており、私文書の研究者として確たる見識を持つ（Monika Gronke, *Arabische und persische Privaturkunden des 12. und 13. Jahrhunderts aus Ardabil,*

Berlin 1982 参照)。「地域的に比較的限定された範圍内での、あるひとまとまりの人的集團の血縁や契約關係を浮かびあがらせる」この文書群からは、社會・經濟上の複雑な諸關係、當該地の地域構造を讀みとることができる(16)。

三つ目の史料は、'Abdī なる人物によって一五七〇年ペルシア語で編まれた、サファヴィー教團の所有する不動産の登記書 *Sarīḥ al-milk* (*ŚM*) である。教團の不動産の所有状況を確定せんと、當時まだ殘存していた原文書を再検査して書かれたこの登記書は、アルダビール文書群に含まれる原文書の内容との比較を可能にする。それによって、法的手續きの具體的な效果や、教團が物件を獲得していく過程を窺うことができる。原文書と、それに對應する登記書というペアの史料の存在は、イスラム學においては、唯一サファヴィー教團の場合にのみ見られる(18)。

「**地理的空間**」(29—60)。ここでは、北西イランの氣候、水利等の一般地勢、民族、言語、宗教の諸状況が言及される。聖者傳 *ŚŚ* に基づく著者の見解の中には、以下のような興味深い指摘も見られる。「トルコ人とモンゴル人は、イランの住民の意識の中では同一視されていた(36)。」「一般民衆 das einfache Volk は、イランという意識よりも、イスラムの信仰の中に自らのアイデンティティを見出そうとし、ムスリムとトルコ人は、後者が非イスラム的な習慣を保つため、協調することのない明確な對立關係の中で捉えられていた(37)。」「しかしその反面、Īrān とか Īran-zamīn というモンゴル治下で再び現れる語が *ŚŚ* にも現れる。この事實は、一般民衆も自らが他の民族と異なるという意識を持ったことを示唆する(38)。」言語については、複數個の使用が一般的であり、サフィー自身、ペルシア語、トルコ語、モンゴル語、アラブ語を話した。また彼は、アルダビールのペルシア語方言 *zabān-i Ardabīlī* を使い、アゼルバイジャンのペルシア語方言 Ādarī で詩を作ったという(41)。

この章で更に興味をひくのは、*ŚŚ* と文書に基づく、都市アルダビールの景觀の再構成の試みである。四つの門やモスクの名稱及び位置の比定がなされ、Manādigāh と稱される、街の中心バザールと、その周圍に形成された小バザール群の存在が浮彫にされる。織物業をメインとして、冶金業、兩替商等の業種別のバザールの大まかな位置が検討されている。また、サファヴィー教團の聖廟建築群の形成史については、サフィー自らが居所のために選び定めた場所にまつわる傳承から始まり、第二代シャイフのサドル Ṣadr al-dīn の時代に起こった、一大聖廟群への發展の經緯が述べられる。聖廟建築群については、モルトンの先行研究があるが、グドンケ氏のそれは、聖者傳を有效に利用している點が注目される。

「**環境、社會、個人**」(61—144)。ここでは、增大する社會不安の中で、シャイフたちは民衆にとって庇護の場であり、精神的な指導者であるという、スーフィズム研究における一基本命題の確認と、奇蹟信仰、聖者崇拜、複雑なドグマの拒絶、アリー崇拜、シーアともスンナとも決定しがたい宗派性といった諸現象の下に概念化される民衆イスラム Volksislam の指摘が、行論の起點になっている。*ŚŚ* からは、當時の宗教生活の實踐がヴィヴィドに傳えられている。ハシーシをスーフィーの修行に使用したり、金曜モスクでの禮拜さえ行なわぬ人々の存在、トルコ・モンゴル的な習慣を想起させるような、男女同席での踊りを許すシャイフ(サフィーはそれら

を非難した)、サフィーの靴や帽子、彼が體を淨めるために使った水や、水を飲むために使った器を手にし、それらに病の治癒や幸運をもたらす效果があると信ずる人々の行動等が描かれる(79 ff.)。不幸や成功の一つ一つが、シャイフのおこす奇蹟に歸せられたこと、十三・十四世紀には、各村落にも自稱シャイフが續々とあらわれ、信奉者を糾合し、ダルヴィシュの活動が顯著となり、その意義を增大させていったこと、またサフィーの許に存在した多くの *ahi* や、彼の非難を受ける *qalandar* の活動も具體的に指摘され、「民衆イスラム的な諸現象を顯著に示す當時の宗教生活は、ダルヴィシュによって體現されていた」と說かれる(105)。

著者はまた、「生活感情と不安」という見出しの章で、未だイスラム學で十分には認識されていない「メンタリティー研究」の分野に觸れる。この研究は、「より廣範な民族的、社會的、文化的な共同體內では、一樣な生活體驗を通して、個々人の持つ思考や感情が、同樣の傾向を示すに至る」という前提に立つ。その意味でイブン・バッザーズ一人の考えで綴られたのではなく、多くの目擊者の證言を集めて成立した聖者傳 *SS* は、重要な情報源である(105)。ここでそのメンタリティーの分析のために擧げられる事項は、奇蹟、夢にリアルな意味をもたせること、*ǧinn* への恐れにみられるような、超自然的なものに對する強い意識、そして死後の世界に對する恐れの四つである。民衆イスラムとしばしば對立して捉えられる、正統信仰を標傍するウラマーさえもその存在を認めた程、奇蹟が大きな意味をもった當時であっても、實は、多くの場合、目擊された奇蹟のみが信用された。奇蹟は一つ一つ、常に懷疑的な好奇心で檢證されたと指摘している(106 ff.)。十三・十四世紀の民衆イスラム的信仰形態は、不安定な生活の中で集團がそろって抱く不安感に對する、心理學的な對應樣式であり、敎團のシャイフ達は儀式的な一定の形式を纏いながら、人々をひきつけ、秩序の枠組を提供した(111 ff.)。

著者は、ダルヴィシュやシャイフが人々の救濟のために、單に現世からの精神的な離脫を援助したり、來たるべきより良き時代への希望のみを與えたという、一部の研究者の見解に異議を唱え、彼らの社會的、心理的な、プラクティカルな意義を具體的に指摘していく。すなわち、彼らは敎團に壓政をなす支配者への警告、敵對陣營間に入っての和平調停、糧食や金錢の貸附と寄附による救貧措置といった社會的機能を重要視し、信奉者の增大に努めた。シャイフ達のみが困窮から人々を救い出すことができるという確信は、社會に深く根を下ろし、「シャイフのもつ權力」という意識は、サフィーを王 *pādišāh* と呼ぶ人々の中に見ることができる(118)。

サフィーの信奉者の人的構成として、一般民衆(女性も含む)の他に、富裕な商人層、ウラマー、サイイド、トルコ・モンゴル系の支配者層が擧げられている。同樣の構成は、サフィーに敵對する人々の中にも見い出すことができる。彼はウラマーに對しては、常に控え目な態度をとり、彼らを非難することはなかったという。トルコ・モンゴル系支配者に對しても、巧妙な手段で、あからさまな對立を避けた。支配者にとっては、ダルヴィシュのもつ莫大な數の信奉者と奇蹟をなす力が、支配に有利に作用するファクターであった。ダルヴィシュにとっては、信奉者を支配者の壓政から守り、所有する財の沒收、掠奪を防ぐためにも、支配者との協調は必要だったと說く(139)。

以上述べた、民衆イスラムという概念を起点とする著者の見解は、他の地域についても多少ともあてはまり、決して新鮮なものではない。ここでより意義を有するのは、サファヴィー教團を軸に展開する、ダルヴィシュの活動の無數の具體例の提示である。イル・ハンたち、チョパン、マリク・アシュラフ、ジャライル朝のウワイスら、諸年代記に登場する人物が、ここでは全く別の顔で、當時の宗教メンタリティーの中で捉えられ活寫されている。

「社會的構成」(145—209)。この章では、アルダビールとその周邊の村落の有力者 a'yān が考察されている。モンゴル支配下のイラン系有力者の家系一般について著者は、かれらはモンゴルの侵攻にも斷絶することなく存續しえたこと、各都市の有力者の家系の構成はモンゴルの侵攻前後で、基本的に變化しなかったこと、かれらの家系の中には、モンゴル治下の新たな政治狀況を利用して、富の獲得や地位の上昇を果した分枝があり、そのような分枝は、その上昇に功ある成員の名をとって新たなニスバとしたことを、カズヴィンやアルダビールを例にとり指摘している(146f.)。アルダビールについては、著者は少なくとも十二の有力者家系が檢出されうるとし、それらを、司法・行政職の官吏を輩出した三つの家系、商家としての二つの家系、シャイフの家系として上昇したサファヴィー家、トルコ系の有力者家系等に分類している。また、トルコ・モンゴル系の家系とイラン人家系の間での婚姻や、不動產取り引きにみられる商業的關係の存在、トルコ・モンゴル系の人々がイラン系の名を子に命名したこと等を示しつつ、「トルコ人とイラン人は水と油の如く、自發的には混じりあわず」という、ミノルスキーの見解に、ささやかな訂正を求めている(145ff.)。

村落部の狀況については、まず、非耕作地帶 sahrā' に圍まれ、城壁と塔と要塞 qal'a を備えるという、モンゴル支配下で最終的に確立する、村落の景觀上の形式が指摘される。續いて、村落の住民 ğamā'at の間では、土地所有や境界設定をめぐっての村落間や村落內での係爭が日常茶飯事であったことが示される他、都市に在住する地主は、分散して存在する私有地からの收入を、在地の農民乃至その代表者である kadhudā に運搬させたこと、更に ra'is と呼ばれる、支配者によって任命された官吏が村落部の監督をしたこと、kadhudā と ra'is の機能分擔は明瞭ではないものの、いずれも、支配者側と在地農民側の雙方の代表という性格をもっていたことが述べられている(207)。この章の最後では、mazra'a という術語の解釋をめぐり、村落部の行政上の區分にも言及がなされている(207ff.)。

「經濟環境」(211—240)。この章は、「財產所有權獲得のための諸狀況」、「所有權確保の手段」、「通貨と價格」の三つのテーマに分けられている。「所有權獲得の諸狀況」で述べられているのは以下の三點。

1、不動產は六分の一 dang を基本單位に計られた。この計測法はモンゴル時代より以前から以後にかけて存在した。アルダビール文書中の一三三一年の日附を有す一通は、例外的に土地の廣さを、そこに播種できる穀物の重さで表示している。この計測法は中央アジアに由來し、當該文書は、北西イランで、このトルコ・モンゴル的な習慣が採られていたことを示す最古の證據である(212ff.)。

2、北西イランの各地所は、一般に複數の所有者によって分割所有され、細分化を極めた。それ故、一人が、一定の廣がりをもつま

とまった土地を獲得するためには、長期間にわたって、複數の人々と賣買契約を交さざるを得なかった。著者はこの細分化の原因を、元來財産の分割を規定するイスラムの相續法とトルコ・モンゴル系の遊牧民による、耕地から牧地への大規模な變換の二つに見ている(215 ff.)。

3、獲得せんとする土地がワクフ地とされ、賣買の流通から除外された場合は、管財人と、その土地について、できるだけ長期の賃貸契約を結び、假の所有形態をとることもあった(217)。

細分化によって混沌とする所有關係の中で、所有權を確定するために採られた法的措置は、以下の四つである。

1、*šurūṭ* の規定どおり、契約文書に賣却物件が賣り手の所有にあり、賣り手が賣却の權利を有することを證明し明記させた。これにより第三者が所有權を主張することを防いだ。

2、買い手は前所有者の所有權證書を、物件の受けとりの際にあわせて入手した。

3、承認 *iqrār* の文言を契約文書中に含めたり、*iqrār* 文書そのものを作り、賣り手は當該物件に對する所有權を放棄し、買い手に讓渡したことを明文化した。

4、同一物件を數回購入することで、將來再び所有權を主張する人々が出現するのを極力防いだ。

著者はこれらの措置の實際を、原文書の分析に基づいて敍述し、口述の證言にのみ證據能力を認める法理論とは裏腹に、文書が確かな證據として效果をもつことを實證した。

通貨と價格について主張されているのは以下の三點。

1、モンゴルの侵攻によって、それより二〇〇年以前から不足していた銀が、中央アジアやヨーロッパから流入するようになった。通貨として再びディルハム銀貨が復活し、銀の代用をしていたディルハム銅貨は、元來のファルス *fals* 銅貨の名稱に戻った。文書から判斷する限り、この通貨システムの變化は一二三〇年と一二四八年の間におこった。同樣に文書に基づいて、一ディーナール＝六ディルハムの價値の比率も、モンゴル治下で定められ、イル・ハン時代を通じて變化しなかったと說く。著者は、この新しい通貨システムの成立に、イラン總督アルグン・アカが關與していたと推測している(227 ff.)。

2、フラグ以降、銀の純度が漸次低下した實狀を踏まえ、ガザンが一二九六—九七年に行なった通貨改革は、從來存在したディーナール金貨を銀貨に變え、ディルハム銀貨をこのディーナール銀貨 *dīnār-i rāig* の從屬單位とする、銀貨本位の導入であった。一ディーナール銀貨＝三ミスカール(1 *miṯqāl*＝四・三グラム)と規定するこの改革の實行は、アルダビール文書においては、一三〇三年の日附を有す一通に初めて確認される。ガザンが導入したこの銀貨本位のシステムは、ティムールがイランに新たにタンガ *tanga* 貨幣をもたらすまで存續したが、改革當初規定されていた重量と價値の割合は、保持されることはなかった(232 ff.)。

3、實際に賣買される不動産物件の價格は質に對應した。例えば十分に灌漑された一つの村落は二〇〇〇ディーナールにのぼり、荒廢地を多く含む村落は五〇ディーナール程度であった(239 f.)。

「**アルダビールのサファヴィー教團**」(240—357)。本書の最終章をなすここでは、如上の社會的、經濟的な狀況の中で、サファヴィー教團自體がいかなる活動をしたかが、主に、最初の二代のシャイ

フに焦點をあてて述べられる。

まず注目すべきは、サファヴィー家が元來富裕な農牧民の出であり、社會的な信望は決してサフィーの教團創設に始まるのではなく、數世代前からこの家系の成員の一部が保持していた商業活動に基づく財や、高位の行政職に因るという見解である。サフィーが自らの家系にもたらしたものは、強い宗教的威信なのである。サファヴィー家がサイイドの家系か否かという懸案の問題については、著者は斷定的な解答は出していないものの、十四世紀半ば既に、この家系が預言者の末裔であると信じられていた事實を指摘しており、決して否定的ではない（244 ff.）。

著者はサフィーとその師ザーヒド Zāhid との關係を述べる中で、ザーヒドはサフィーの中に、自身とは全く異質のパーソナリティーを見、宣教や、教團の問題の解決に見せるその行動力ゆえ、自分の教團すなわちザーヒディーヤ Zāhidīya のシャイフの地位を、息子にではなく、娘婿のサフィーに委ねたと考えている（251）。サフィーの生涯にわたる活動を總括して、著者は次のように言う、「サフィーは、現實の社會に極めてオープンな態度をとりつづけた。異民族の支配に直面して、それに操られることなく、イスラムの信仰を強化し、ムスリムに新しい局面を與えた。サファヴィー教團の成功の前提として、創始者である彼の多面的、カリスマ的な人格があったのである。彼は心理的、社會的、そして經濟的な土臺を築き、第二代シャイフ、サドルはそれを足場に教團を發展させた。」サフィーは、十六世紀になってサファヴィー朝に敵意を抱いたスンナ派の歴史家や神學者によっても、「イスラム法の眞の代表者」、「完全なる師」として、偉大なる聖者に列せられた。*SS* の中で、サフィーはヒジュラ暦七世紀の *muǧaddid*（百年に一度現われる信仰の革新者）とみなされたという指摘（261 ff.）は、モンゴル支配以降のイラン宗教史を認識する上で、重要な意味を持つと評者はみる。

サフィー沒後五七年もの間、教團を率いたサドル（一三〇五―一三九一／九二）の活動は、それが長期にわたる割には意外と知られていなかった。評者は、かつて著者のもつゼミに參加した折、女史がサドルのこのあまりに長期の教團經營を強調していたことを思い出す。著者が、ここに教團の發展の鍵を見い出しており、サドルの活動の考察が本書のキー・ポイントの一つであることは明らかである。著者が指摘する内容は以下の三點である。

1、サドルは、マリク・アシュラフとの軋轢が原因で逃亡していたギーラーンから、再びアルダビールへ戻った一三五六年を契機に、活潑な經濟活動を展開した。すなわち、逃亡中に混亂した、教團やサファヴィー家が所有する不動産物件を再確認して確定すべく、登錄を始めた。また、物件の獲得を、計畫的に、財の擴大という意圖を明確に定めて、大々的に行なった。この行爲は、父のサフィーさえ、生前あまりにも世俗的と警告した類のものだった。アルダビールの街の内部のバザール等を、計畫的に獲得したのは、サドルが初めてである。また、アルダビール周邊に飛び地として散在していた私有地を結び、廣大な土地所有を實現すべく、各飛び地の間に横たわる、他者の所有にあった地所を、忍耐強く、長期にわたって複數の人々と契約を重ねつつ獲得していった（269）。

2、教團とサファヴィー家の信望を高めるべく、父サフィーの傳を集成した *SS* の編纂を促した。また父の墓廟を再建し、教團の修道場も大規模に擴大した。Kalḫūrān にあった祖父の墓もアルダビ

ールに移した。サフィーを通じて、自らの家系が威信と信望を得た事實を鑑み、サドルは、父の名をとって、サファヴィーというニスバを自分につけた。この新しいニスバを附すことは、サドルの家系がアルダビールの名家になりえたことの象徴ではあったが、サファヴィー家の信望の土臺は、他の有力者の家系とは異なり、飽くまで宗教的なそれであった（271）。

3、サドルのこうした活動は、同時代人に強烈な印象を殘した。その印象は口承で後世まで傳わり、重大な事件と結びついて傳説化された。サファヴィー家とティムールとの交流を語る諸傳承もここから生した（272 ff.）。

本書の結論は、この章の最後に述べられている。すなわち、著者は次のように言う、「サファヴィー教團の初期のシャイフ達は、現世の諸事や政治に能力を發揮した活動的な男たちであった。彼らは、時代の趨勢に影響を與え、現世の生活のあり方に關わった。教團は宗教的な性格を保ちながらも、世俗權力として成長していった。これまで多くの研究者がイメージした、俗世に目を背け、瞑想に耽けるスーフィーの姿とは異なる（357）。」

本書の概要は以上である。本書の特徴として以下の二點を擧げておきたい。

まず第一に使用された史料である。文書の援用は、著者だからこそ可能であった。かつて女史と話をした際、日本のイル・ハン朝研究者なら、まず全ての人が知っているであろう傳説上の人物アラン・ゴアを、女史は知らないことに氣がついた。しかし、これは女史の不名譽なのではなく、日本とヨーロッパとでは、視點が根本的に異なることの示唆なのである。現に日本では、かなりの研究者がおりながら、管見の限り、*SS* や *SM* を未だ誰も利用していない。イスラム史の研究では、往々にして、日本とヨーロッパでは實のところ互いに相補う視點で研究していながら、未だ十分な交流がないように、評者は感じている。本書は、冒頭で述べたように、視點もメソッドもヨーロッパのイスラム・イラン學の傳統に基づいている。それ故、本書は日本人研究者にとっては、特に興味深い研究になるかと思う。

第二に、社會、經濟、宗教にわたる諸々の具體相が、膨大なデータに基づいて、體系的に描寫されている點である。殘念ながら、この紹介欄では緊張感さえ讀者にもたらす、次から次に描かれる事例の數々を再現できなかった。讀者は一つの事例を知ることで、一つの認識を得るかもしれない。尙、本書には入念に作成された索引（381—436）が附せられている。これによって、本文だけで三五七ページに及ぶ本書の扱いが容易となろう。ただし同じ主張や史料引用の繰り返しが通讀を若干困難にしているという印象は殘る。一冊の本の執筆の際には、繰り返しも必要であろうが、今少し構成を改めて、簡素化できたのではないかという氣がする。

著者は、博士論文と本書との二冊の學術專門書を出版し、漸く、ドイツの教授資格條件を滿した。

Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1993. x＋436 S.